

竹久夢二と「宵待草」

門脇むつみ

ただ今ご紹介いただきましたように、私は主に桃山から江戸時代の絵画を勉強しております。夢二について専門的に勉強をしてきたわけはございません。今回は「宵待草」の碑が山武郡九十九里町にございますことから、講座のテーマとしてどうかというお話がありまして、私も大変面白いと思いましたが、お引き受けしたような次第です。そのようなわけで、にわか勉強です。ところが、竹久夢二に関しては大変多くの研究があり、展覧会もさまざまにございますし、いろいろな方がいろんなことをお書きになっておられて、にわか勉強ではないものではないようなところがございます。今回、発見というほどではないですけれども、私なりに新しいこととしてお話できるだろうと思うこともございますが、それもよくよく調べてみますと、どなたかが既に書いておられるかもしれない、ということも、冒頭から恐縮ですけれどもお断りしておきます。

さて、夢二といいますが、こういう夢二式美人と言われる作品「待つ人」大正前期、竹久夢二伊香保記念館を思い浮かべられるのではないかと思います。夢二のSGVOイところは、誰が見ても一目で「あ、夢二だ」と分かるスタイルを作り上げたことでしょう。目の大きな手足の長い、全身が細く曲線を描く美人です。こんな足で歩けるのだ

ろうか、こんな手で扇がもてるのだろうか、というちょっと現実離れた細身の、なよっとした女性ですね。彼は、単なる画家という以上にデザイナー、作詞家としてなど、幅広く活動した人ですけれども、やはり本領は絵にある、このような非常に独自のスタイルを作り上げた絵にあると私は思います。今日は、その夢二について、一体どんな人物、画家だったのか、現代人にとってどんな意味をもつ存在なのか、といったことを、夢二作詞の名曲「宵待草」を通じてみていきたいと思っております。

はじめに夢二の人となりといったことをお話いたします。「宵待草」についてお話する前置きとしては少々長くなるかもしれませんが、御承知の方も多いでしょうけれども、「宵待草」が夢二その人のありかたを象徴するようなものと考えておりますだけに、やはりその生涯をおおそお話してからと思います。お配りした資料にございますように、夢二は一八八四年に生まれて一九三四年に亡くなりました。つまり、明治の半ば以降から大正全部と昭和の初めを生きました。夢二の写真としてよく知られているのはこれだろうと思います。京都に一時滞在していた三十三歳の写真です。けれども、竹久夢二専門の美術館などで最近もっぱら使っているのは晩年のこの姿のようです。夢二は五十歳になる直前に亡くなりますので、四十代の後半ぐらいでしょうか。夢二を直接知っていた人が書いたものに、色が黒くて非常に気難しくて付き合にくい人だというようなことが割合とみられますけれども、この写真にはそういう感じがうかがえるように思います。夢二という画号は、優男、ハンサムを連想させますが、実際はそうではない。それに対する憧れのようなことが、彼にはあったのだらうと思います。それにしても、「夢二」と

いう画号はおそろしく彼にあつています。ちなみに本名は茂次郎（もじろう）といいました。それが「夢二」です。明治生まれの男性が名乗るには軟弱なイメージのようにも思いますが、それだけに非常に飛び抜けた発想になるといえるのではないのでしょうか。禅宗ではこの世の一切が仮のものというような意味あいでも夢という言葉が割合によく使いますので、そういう禅宗的思想が背景にあるのかとも考えましたが、そうではないだろうと思います。一説では画壇の大御所・藤島武二、この人は後にお話するように夢二と縁浅からぬ人ですが、に懂れていて、武二にならつて夢二と付けたんだということですが、どういう理由でつけたにせよ、あの夢二式美人にびったりと合う、それを裏切らない雰囲気の音、漢字の、これ以上はない画号です。

現在でも大変人気のある画家で、彼の名前を冠した美術館が全国に複数あります。出身地である岡山県に夢二郷土美術館。東京の文京区に弥生美術館・竹久夢二美術館、群馬県に竹久夢二伊香保記念館、栃木県日光に竹久夢二美術館、石川県に金沢湯涌夢二館。国内に日本の画家の名前が付いている美術館はそれなりの数ありますけれども、一人の画家のものが複数、それも各地にあるというのは幕末の浮世絵師・歌川広重のそれが確か四つありますが、それ以上にあるのは夢二だけだと思います。文化行政をめぐる状況がじつに厳しいこの時代に、つくづく夢二というのは人気があるんだなと思います。ですから展覧会も、たとえばこの年末からお正月にかけて池袋の三越で日光の竹久夢二美術館のコレクションが展示されたり、と度々ございます。

作品の大部分は美人画ですね。そして、この夢二式美人には彼の女性関係が多いに影響しているようです。彼は女性との恋愛を創作の活力に

するという、現代のわれわれが思う芸術家、画家像を裏切らないタイプの画家で、次々と女性を変えます。その中でも特に三人の女性がよく知られ紹介されています。他万喜（たまき）という最初の奥さん。彦乃という、結婚はしなかったですけれども、夢二のファンの女学生で自身も絵を描いていた人。彼女のお父さんが結婚に反対して二人を引き離し、若くして亡くなってしまふという悲劇的な別れ方をした恋人です。彼女の絵と夢二の絵をあわせて展示する「夢二、永遠の人、笠井彦乃」という展覧会が昨年度内でもございました。それから、三番目にお葉さんというモデルだった人。夢二の三十六歳から四〇代初めにかけて一緒にいましたけれども、結局、けんか別れのような形で離れていってしまった。お葉さんは、大正から昭和初期の美術界を語る上では非常に大事な人でして、夢二の前にも伊藤晴雨という責め絵といつて女の人を縛ったりするような絵で有名な画家のモデルをしていて、次に夢二のモデルとして夢二の代表作となるような幾つかの作品に描かれ、夢二と別れた後、藤島武二、洋画界の大御所で、今の東京芸大の教授で洋画界をリードしていた人がお葉さんが以前に美術学校のモデルをしていたころからの知り合いだったので、藤島の代表作のいくつかのモデルを勤めました。そして、藤島の仲立ちで別の人と結婚します。このようにモデルとして特筆すべき人生を送った人で、彼女についての評伝（金森敦子『お葉というモデルがいた』一九九六、晶文社）があります。

夢二は、そのときに自分の奥さん、恋人をスケッチし、それをもとに創作意欲を膨らませて作品に仕上げていくということが多かったやうで、夢二の作品、美人画を見ていきますと、「お葉さんがモデルだな」とか「これは他万喜の時代だな」というのが、絵の様式、描き方が

年代によって変わっていくということもあり、モデルの女性の違いで変わります。そういう意味で、後の「宵待草」の成立にもかかわりますが、夢二を考える上で女性は切り離せないことだと思えます。

次に大事な点は、夢二は正規の美術教育を受けたことがないということです。画家を職業とするためには、美術学校を出るか、しかるべきお師匠さんについて絵を学んで、お役所がかかわっている展覧会つまり官展に入選するなどして箔を付ける、というのが普通のコースです。それによって絵に値段がついて、弟子もついて、画壇での位置を得るといシステムがあるわけです。ところが夢二は、いろいろな事情はあるようですが、そういうこととは無縁で、当然ながら、それが彼の制作姿勢、作風に非常に大きく関係しています。

夢二はまずコマ絵という、新聞や雑誌に挿絵、といっても文章に直接かわらない絵をいれる、そういうものでデビューします。岡山から絵が好きで上京してきた青年であった夢二はこれに何度か入賞し賞金が出て、画家としてやっていけそうな自信を得ます。そして画家として世の中に広く認められるようになるのは明治四十二年、二十六歳で刊行した『夢二画集 春の巻』です。これが大変ヒットします。世の中に竹久夢二という名前が認知されて、夢二ファンの女学生がいて、というように状況が生まれます。また、三十一歳のときに港屋という自分がデザインしたいろいろな物をお店を開き、これがまた大変人気で、女学生たちが港屋夢二製の封筒と便箋と夢二デザインの半襟を愛用し、少女ファッション界のアイドルのような存在になります。今みてもレトロモダンというか、おそらく夢二デザインと気づかずに接しておられること

もあるかもしれませんが、デザイナーとしての力量は大したものなあと思います。それから、晩年には夢二人形と言われる、人形の制作もしています。後に人間国宝となる堀柳女が制作を手伝っていたり、と日本の人形の世界にも大きな影響を与えています。

こうした夢二のさまざまな仕事を示す数字があります。ある記録によると、生前展覧会に出した作品一〇〇〇点余、自著六〇冊、自著以外の装丁本二四〇冊、楽譜表紙装丁三〇〇点余、絵はがき四五七枚以上、新聞などの挿図六二〇〇点、文章八〇〇点、詩や短歌二〇〇〇点などということです（小川晶子「夢二のふるさと」『展覧会図録』竹久夢二展 描くことが生きること』千葉市美術館 二〇〇七年）。なかでも五十年に満たない生涯に六十冊の本を書いたというのには驚かされます。ある人が夢二について「呼吸するように描く」といったふうなことをお書きになっておられましたが、そうなんだろうと思います。絵だけではなく、文章も呼吸するように書いていたんでしょう。悩んで悩んで絞り出すのではない、推敲なんてことはせず思ったままそのまますかたちにしていく、絵も文章も。そういう生涯だったようです。

夢二は最晩年、あまり幸せではありませんでした。息子も三人いて一緒に暮らしている女性もいましたけれども、金銭的なトラブルと、台湾に行つて帰ってきて体調を崩して療養所に行つて、すぐ治るつもりが結局治らなくて、たった一人で亡くなってしまつたという、不幸な亡くなり方をします。これは亡くなってすぐに夢二と交流のあった人たちがつくつたお墓で東京の雑司ヶ谷の霊園にあります。「竹久夢二を埋む」という碑銘を有島生馬、有島三兄弟のうちの一人で夢二と非常に親交が深かつた画家が書いています。

そんな夢二を題材にした小説、映画はいろいろありまして、私も全てを読み、みてというわけではありませんが、鈴木清順監督の『夢二』は印象的でした。夢二役は沢田研二です。これは鈴木監督の『ツイゴイネルワイゼン』などを思わせるような、難解でシニールといいますが、時間軸と空間軸がねじれて複雑に絡み合った、ストーリーがあるようなでないようなというふうなものですけれども、夢二という人、その周囲の人、時代の雰囲気濃厚に感じられました。これまでに他に映画で北大路欣也、バレリーナの熊川哲也、お芝居で舟木一夫、テレビドラマで奥田瑛二なども夢二を演じているようです。

さて随分と前置きが長くなっちゃいましたが、「宵待草」は、その夢二が作詞後に曲がついて、楽譜(図1)が売り出され大変ヒットした、そして今でも大正ロマンを象徴する曲としてよく知られているものです。夢二の作詞ということ、むしろあまり知られていないかもしれないかもしれません。この「宵待草」について、これがどういふふうにして生まれたのか、具体的な契機となった恋愛との関係、それからもう少し広く、そういう詞が生まれてそういう曲が流行した背景といったことを考え、影響といったこともみてみようと思います。

まずは曲を聞いていただきましょう。ソプラノ歌手・塩田美奈子さんの歌です。(曲鑑賞)一度聞くとずっとメロデーと歌詞が頭にはいる印象的な旋律と歌詞ですね。

待てど暮らせどこぬ人を

宵待草のやるせなさ

今宵は月も出ぬそうな

今回あらためて楽譜をみながら聴きまして、最初の「待て」のところ



図1 「宵待草」楽譜表紙
(大正七年)

がソからソまで一オクターヴ離れていることがやはり大きな特色だと感じました。資料の一つに作曲者の多忠亮(おおのただすけ)の息子さん・多忠昭さんの「おやじのヒット曲」(河北倫明ほか監修『夢二美術館4』、学習研究社一九八五年(新装版一九八八年))という文章をお配りしましたけれど、そこにもオクターヴ「跳ね上がる」という作曲上の手法と着想が、この曲の生命になっている」とあります。ここに歌い手の、技巧や表現をさまざまに込めることができるということでしょう。多忠亮は、現在の東京芸大でヴァイオリンを勉強していた人です。この出だしは、いかにもこれヴァイオリン的といいますか、ヴァイオリンだから発想できたように思います。最初がオクターヴ始まりであるというのは曲として非常に印象的な、それだけでやるせなさとか切なさを演出できるテクニックのようですが、それが歌詞と非常によくあっています。ま

た、先ほど聴いていただいたCDの解説には、この曲はコンサートのアンコール曲として人気を得て広がったとあります。短いということだと思えます。一番だけだとほんの数分ですので、アンコール曲として人気を得たということのようですね。

次に歌詞をみていただきます。リズムと韻が非常によく出来ている。「待てど暮らせどこぬ人を」が三、四、五音、「宵待草のやるせなさ」が七音、五音、「今宵は月も出ぬそうな」七音、五音という、七、五音を基本とする日本人にとって気持ちの良い五七のリズムです。一度聞くと覚えられるのはそのためでしょう。

そして「待てど」「来ぬ人を」「宵待草」と各節の始まりの母音が「あ」音か「お」音です。この「あ」と「お」の繰り返しのいうのも、母音のなかでは音が前にでて、メロディーにのりやすいのではと思います。松任谷由美に「春よ、来い」というNHKの朝のテレビ小説の主題歌になった歌がありますが、これについて夫の松任谷正隆が「あ音で始めなさい」というふうにアドバイスをして歌詞の最初を「淡き」としたという話を聞いたことがありますけれど、やはり音が前にでるということではないでしょうか。それから「ど」、「待つ」という言葉が繰り返されていきます。つまり、言葉のバリエーション、音のバリエーションは少ない。それが覚えやすいこと、全体のまとまりのよさにつながっていると感じています。

また「待てど暮らせどこぬ人を、宵待草のやるせなさ」で待ってる人の気持ちの内側に視線を向けていたのが、「今宵は月も出ぬそうな」で視線を空に転じる。そして、その後、歌詞はありませんけれども、その空を仰いで月がないことで、空に向けた視線が再び待ってる人の気持ち

に跳ね返ってくるといった、余韻のある、起承転結のようなまとまりのある歌詞だと思います。「月」と「待つ」の組合せ、あるいは「来ない人を待つ」ということは、資料に記しましたように古くから歌や文章に詠まれてまいりました。立待月、居待月といった言葉が代表するように月〓待つ、なのです。それが、宵待草という草を詠み込むことで、何だか新しい感じ、お洒落な感じになっているように思います。

宵待草というのは、ちよつと不思議な名前ですね。宵待草という植物はありません。宵待草のイメージのものはマツヨイグサとかオオマツヨイグサだろうと思われます。しかも、オオマツヨイグサとは別に月見草という草があります。そしてオオマツヨイグサは一般的に月見草と誤解されている。植物学的には、月見草とオオマツヨイグサというのは別で、月見草は夜、月の出るころに咲いて花が白い。オオマツヨイグサは夕方咲いて花が黄色い。けれども、一般には、また文学の世界では月見草と言っている、花の黄色い方、オオマツヨイグサを指すとしてよいようです。太宰治の『富嶽百景』にある有名な「富士には月見草がよく似合う」という一文も、オオマツヨイグサと考証されているようです。夢二のいう宵待草は、その名前の植物はないけれども、オオマツヨイグサなど宵待草、それは植物学上のそれではなく黄色い花の月見草とみるべきですがそれに想を得ていて、待宵草の「待」と「宵」とを反対にしたものと考えてよいでしょう。宵待となつてるのは夢二が待宵を間違えたのかもかもしれませんけれども、結果的にはそれで良しとした、夢二が作った造語とお考えたいだいたいと思います。「宵待草」の楽譜にもタイトルが「宵待草」とあるものと「待宵草」となつてるものと二種類知られてます。歌詞はどちらも「宵待草」になつていて、夢二の中でど

ちらがどちらというようなことはなかったようです。〔宵待草〕のほうが何となく語感がいいからそうしたけれども、楽譜の表紙がどうなつても構わないぐらいのことなのでしょう。

この歌は、後でお話しますように夢二自身の失恋というか、かなわなかった恋の思い出が発想のベースになっていますが、歌詞だけ見ると男性の心情を歌ったものとも女性の心情を歌ったものとも取れると思います。女性のソプラノ歌手が歌うことが多いこと、また古くから月、待つ、女というのは縁語のようなものであることなどから、この歌は来ない男性の恋人を待っている女性の歌だというふうに思っておられる人が多いかもしれません。私はそう思っておりません。けれども、そもそもは夢二自身が待つ人だったわけです。そう思ってみると、これは男性、女性、どちらの歌にもなる、それもまたこの歌が愛唱された理由の一つだろうと思いますね。

少々脱線いたしますが、以前に「宵待草」の作詞者が竹久夢二と知ったときに連想したのは、男性歌手が女性の心情を歌う、いわゆる女歌のようなものの系譜です。男性二人組の歌手・チャゲ&飛鳥に「終章〜エピローグ」という、始まりがやはり低音から高音へのオクターヴでメイソンの楽器がヴァイオリンというものがあります。歌われているのは男女の別れ、そのときの女性の心情です。そのため男女どちらの気持ちともとれる歌詞というわけではありませんが、男性が歌うからこそ味わいがあるといった点で、現代版「宵待草」のようにも思います。何ら学問的な裏付けがあるわけではないのですが、「宵待草」的なものは現代歌謡曲にも続いている、そんなことを思ったりいたしました。

夢二という人は、新しい男性像を描き出した人だと思っております。

私がそのような考えをもった後に、そのことを書いた論文がある（西山純子「竹久夢二について―恩地孝四郎との交流から」前掲『展覧会図録』竹久夢二展 描くことが生きること）ことを知りました。彼には泣いている男の人の絵というのが結構あるんです。これは「生きる屍」（一九一七年、夢二郷土美術館）というトルストイのお芝居の一場面を描いたもので、芝居の内容をあらわしているわけですが、顔を覆ってあからさまに嘆く男性がおります。またこれ（『少年と犬』大正前期、夢二郷土美術館）も犬のそばで、犬が見ていようが何しようが、ともかく泣く少年です。こういう女々しいというか、まさに泣いている様子の男の人を絵に描く、それを単独で主題にするということは、これ以前にはないと思います。

こういう夢二の好みが「宵待草」の底流になっているのではないのでしょうか。夢二のセンチさ、弱々しくて感情におぼれるところ、それを恥じないところ、あるいは人間のそういう部分をつつめる、その姿勢が象徴的にあらわれているという意味で「宵待草」は夢二の代表作といえるべきものだと思います。

次に「宵待草」成立の具体的な経緯をたどってみます。まず、こちらが九十九里町の碑（図2）です。東金駅のプラットホームにも駅近くの名所として掲示があつて、近隣にお住まいの方はよくご存じだろうと思います。旧片貝港のそば作田川沿いの道路に面して建てられています。本学からですと車で二〇分くらいでしょうか。私、ずっと行きたいと思いつながらこれまで機会がありませんで、この講座をきっかけによく行く行ってまいりましたけど、海に近い空がひらけた、非常に気持ちのいい場所でした。碑の表に「待てど暮らせどこぬ人を」と歌詞が刻まれて



図2 竹久夢二碑
(山武郡九十九里町)

います。裏面に「九十九里へ」という文章がみえます。これは資料に載せましたが、明治四十年、二十四歳のときに読売新聞社に入社し掲載された紀行文の一部です。六月四日に今の鳴浜村の辺のことを書いた「涼しき土地」の中、「月よき夕は、鳴門川の橋を渡りたまへ」と始まる一文の末尾に「その時君の脛を冷くうつとも、驚きたまうな。月見草である」と月見草がでてきますが、この文章が裏面に刻まれています。昭和四十一年の建立です。ここにいう「鳴門川」が成東町と九十九里町の境界を流れる、現在の作田川です。ですから、この碑は作田川沿いのこの場所に建てられたのですね。

これ以外に千葉県内にもう一か所、「宵待草」の詩を刻んだ碑が建っています。銚子の海鹿島、銚子電鉄の海鹿島駅を下りて少し歩いたところにあります。夢二が海鹿島での恋を基にしてこの詩をつくったからです。以前は「宵待草」に関わる場所、エピソードとしていくつかの説が

ありましたが、今では海鹿島で定説化しています。明治四十三年八月、二十七歳で最初の奥さんの他万喜と離婚してはいますが、彼女そして長男と一緒に海鹿島に避暑にやってきました。他万喜とは離婚後もつかず離れずの関係が続いておりました。「宮下」という民宿に滞在しますが、お隣に長谷川さんというお家があって、そこに成田市から遊びに来ていた賢（たか）という十九歳の女性がいた。成田高女の先生をしていていたお姉さんと一緒に成田に住んでいて、そこから夏の間、銚子の実家に遊びに来ていました。夢二はこの女性に恋をします。そして、その年の十二月、翌年一月と再会しますが、次の八月に海鹿島を訪ねたときには、賢さんは既に嫁いでしまっておりません。夢二は再会がかなわなくなった彼女との思い出、失恋を「宵待草」の歌のモチーフにした、と考えることができます。

この長谷川賢という女性を夢二は「お島さん」と呼んでいます。夢二は先ほどのお葉さん、それ以外にも日記などをみると、本名ではない名前前で女性を呼ぶことを好んでいたようです。ただしお島さんの場合は、お姉さんが島という名前で、隣の家から「島、島」と聞こえてくるのをどうやら賢さんの名前だと思って「お島さん」と呼んだと言っておられる方がいて納得したのですが、海鹿島の「島」を取っているという意見もあるようです。

夢二自身が書いたものは「夢二日記」、「夢二書簡」としてかなり多く残っております。遺品をきちんと受け継いで、また散逸したものを集めて、整理された方があって、一般書籍として刊行されており手軽に入手することができます（関川左木夫編『夢二の手紙』講談社 一九八五年、長田幹雄編『夢二日記』一〜四 筑摩書房 一九八七年、長田幹雄編『夢

二書簡』一〇二 筑摩書房 一九九一年)。その「夢二日記」にお鳥さんについても記録があります。読んでみますと「待つ」、「岡」、「松原」そして「月見草」というのが、お鳥さんにもまつわる思い出のキーワードです。たとえば、八月二十八日は「あの草の岡を上つて、私は歩いた」、「松原へいつた」、「まつて〜まつた」とあります。八月三十日には「あ、あの岡、おもひ出すと苦しい」、「月見草をくれた少女よ、私はあなたが忘れられない、手紙をまつて〜ゐるのだよ、今日、地図を出して成田の辺を見て泣いた」と書いています。先ほど、宵待草のイメージのものは月見草だろうと申し上げましたが、それはこんなところにもよるわけです。

ところで、彼のこの恋について妻の他万喜はある文章の中で「海鹿島で夢二がまた新しい愛人お鳥さんを作り出しました。お鳥さんとの空想的な恋愛」(「夢二の想出」・長田幹雄「宵待草」おぼえがき)「長田幹雄編『竹久夢二』昭森社 一九八五年」による)と書いています。夢二の日記を読んでも、どうもお鳥さんのほうは積極的じゃなかった、確かに二人は会ってはいたし、手紙のやりとりもしていたけれど、いわゆる恋愛関係にはなかったことが分かります。夢二が空想的といいますが、彼女に一方的にいろんなイメージを投影して、彼女とたまに会うことを楽しんで、彼女がくれた月見草を大切に思ったりしているんです。十二月二十八日の日記に「おや！十二月だといふのに、月見草が咲いてゐる。おしまさんのくれた花、おしまさんに逢つたよふな気がする」とあります。自分勝手に思いを膨らましてイメージを作っていたところがあつたようです。

その後、詩が発表され、「宵待草」が流行歌となるのは次のような経

緯です。明治四十五年六月、お鳥さんとの夏の思い出から二年後ですが、「宵待草」という詩を雑誌『少女』に発表します。これは八行の詩でした。「遣る瀬ない／釣鐘草の夕の歌が／あれあれ風にふかれて来る／までとくらせど来ぬ人を／宵待草の心もとなさ／『おもふまいとは思へども』／われとしもなきため涙／今宵は月も出ぬさうな」。そして大正二年に今、私たちが知っている三行詩の形で夢二の第一詩集『どんたく』に発表されます。多忠亮がこの詩を気に入りまして曲を付け、大正六年に東京で演奏します。そのころ京都にいて演奏会に行けなかった夢二にあて、多は演奏会の成功を報告する手紙を楽譜を同封して出します。そして京都の夢二を訪ねたオペラ歌手の内山惣十郎に、夢二が「こんな楽譜が送られてきたけれども、自分は楽譜が読めないのです、ちょっと歌ってみてくれないか」と頼む。内山が歌ったところ、夢二は「ああ、いい曲だ」と気に入って、内山もいい曲だと思つて、この人、初期の浅草オペラで活躍していた歌手のようですけれども、その浅草オペラの舞台などで歌ったところ、非常に好評だったと。

それから間もなく大正七年九月に、セノオ楽譜から夢二作詞、多忠亮作曲「宵待草」が先ほどお見せしたこの楽譜、表紙で売り出されます。そして大流行します。夢二はセノオ楽譜から作詞の曲をたくさん出してありますし、何よりセノオ楽譜の二百点近くに表紙の絵を描いています。

この曲が発表された大正七年秋は、夢二にとっては大変な時期でした。恋人の彦乃との逃避行で東京を離れて、彼女が病気になる入院しということがありました。そのためでしょうか、「宵待草」の発売や流行などについて日記などには記録がみあたらないようです。楽譜発売前

後だけではなくその後も、「宵待草」について日記や手紙で発言がないようで、夢二自身がこの曲をどう思っていたかを直接示すような資料はありません。ただし、曲が発売されてから五年後ぐらいのことなのですが、夢二の家の前で友人たちが「宵待草」を歌ったとか、夢二と一緒に「宵待草」を合唱したとか、いった記録があります。全国的に流行し、夢二自身もこの曲を気に入って歌ったりということがあったようですね。

また、西条八十の文章（『唄の自叙伝』、一九五六年）に次のようなものがある、二番が作られたいきさつが分かります。昭和四年、夢二が亡くなる少し前に西条八十と一緒に赤城登山をしました。その折、八十が「宵待草」について、あの曲はいい曲なので二番も作ったらどうですかと言うと、夢二は古い曲なので「あなたにでも書いて頂くか」と答えた。夢二が亡くなって四年後にこの曲をモチーフにした映画「宵待草」の制作、そして主題歌を高峰美枝子が歌うことがきまった。ところが一番だけだと短いので二番が必要ということになり、八十が赤城登山の縁もあって二番を作りました。ただしこの二番は最初の歌詞の一部が不評で訂正したりといったこともあり、その後、あまり歌われることなく、現在に至っているようです。

おおよそそのような経緯で「宵待草」という曲は生まれ、世の中に広がっていきました。なお、この曲についてはこんな意見もあります。大阪で活躍した歌人・石上露子の「小板橋」という歌が本歌だという説です。八行詩の「宵待草」と「小板橋」が非常に似ているという説なのですが、私にはそれほど密接な関係があるとは思えませんでした（宮本章「石上露子作「小板橋」と竹久夢二作「宵待草」の成立とその相関に

ついて」『四天王寺国際仏教大学紀要』人文社会学部三三三号 二〇〇一年）。

それからこれが「社会主義の到来を待つ」心情を込めたものという興味深い解釈が根強くあります。夢二は若いころに『平民新聞』に挿絵を描いています。そこで社会主義者、大逆事件で殺された幸徳秋水などと顔見知りでした。また、晩年にヨーロッパに旅行しますが、そのときにユダヤ人を迫害から守るために活動していたということが、六年ほど前でしようか、NHKの取材などで明らかにになりました。夢二は社会主義者ではなかったと思います。主義を自分から唱えて、そのために活動するという人ではなかったでしょうけれども、社会の底辺に暮らす人に思いを寄せていたことは確かですし、社会主義的な考え方に共感していたとは言ってもよいようです。そこで「待てど暮らせど来ない」のは社会主義が実現する世の中、みんなが平等で楽しく暮らせる世の中であり、この歌はそのやるせなさをうたったという解釈があります。可能性はあるだろうと思いますし、そういう解釈が可能になる含みをもつということが、この歌詞の魅力だろうとも考えます。とはいえ、月見草、待つといったキーワードは海鹿島の思い出あってこそと思います。

さて次に「宵待草」の成立背景をもう少し広く、まずは夢二と月見草のかかわりといったことからみていきたいと思います。夢二は海鹿島での恋愛以前、「宵待草」作詩以前からマツヨイグサつまり月見草が気にかかる花だったようです。なお、夢二の絵や文章と月見草の関係をまとめて石川桂子さん（『八月見草』と『宵待草』に関する一考察 前編・後編』『弥生美術館・竹久夢二美術館だより』七八、八〇号 二〇〇四、〇五年）が考証されておりまして、私も参考にさせていただきましたが、

自身で気づいたというようなことも以下お話いたします。

現在知られている夢二の全ての文章の中で月見草が最初に出てくるのが、先ほどご紹介した九十九里の作田川についての紀行文「涼しき土地」〔房総文芸選集太平洋沿岸地区集Ⅰ〕あさひふれんど千葉、一九九五年）です。先ほどみました「驚きたまうな。月見草である」という一文で、この時点では「女性」、「待つ」といったことは結びついていません。その後、明治四十二年にこれも先ほどふれました大ヒットした画集『春の巻』に「月見草の君」と題した絵が載せられています。三日月のようですが、それを背景に立つ女性の姿です。それから、これも海鹿島に行く前ですが、知人に宛てたはがきに「見果てぬ夢の花」として、女性、太陽と月見草とみてよいだろう花を描いています。さらにその年、その後すぐに出す『夏の巻』という画集の表紙に月見草と太陽が大きくあらわされております。

このように夢二は海鹿島でお鳥さんに会う前から月見草が好きで、女性に似合うといったイメージをもっていたようです。それがお鳥さんという人との出会いで一気に膨らんだといいますか、具体的な形を取ったというようなことではないでしょうか。

海鹿島の避暑の直後、失恋する前に「岡の記憶」というタイトルの絵（『夢二画集 野に山に』）（図3）があります。月見草があつて、やはり水辺で、単色刷なのではつきりとは言えませんが、おそらく水に沈む太陽をあらわして、手前に大きく女性を描いております。この女性にはまさにお鳥さんの面影が反映されているとみてよいでしょう。ただし「宵待草」の楽譜（図1）、ちなみにこの楽譜は関東大震災の後に、別の表紙で再度発行されますが、いずれのバージョンにも宵待草はもとより、



図3 「岡の記憶」
（『夢二画集 野に山に』より、
明治四十四年）

そもそも花が描かれていません。また、夢二の作詞にセノオ楽譜の社長である妹尾幸が曲を付けた「松原」という曲の表紙（大正一三年）もあげておきます。描かれている女性は「宵待草」と同じ縞の着物を着ております。夢二は多作であるためもあつて特定のイメージを繰り返す使用ということがよくありました。そして、「松原」の、この着物で松原で待つている女性のイメージのベースには、やはりお鳥さんがあるように思います。歌詞「あの松原が忘れりよか、紫色の帯しめて、松にもたれて待つて居た、あの娘（こ）のことが忘れりよか。この松原は今もある、もたれた松もそのまゝに、そしてその娘もこの俺も、生きて日本にゐるものを。」といった言葉にも、日記に記されていたような海鹿島での思い出が反映しているのではと考えます。

また、大正二年八月、八行詩の「宵待草」を発表してからしばらく、三行詩を発表する前、大阪毎日新聞の「名家の嗜好」というアンケート

の「貴下の最も好まる、住たしと思はる、花」という質問に夢二は月見草と答えております。三行詩を発表する直前ですので、夢二にとって月見草という花が特に気になっていた時期かもしれませんが、こういう答からは、彼がこれを好んでいたことは言えるだろうと思います。

そして、「宵待草」がヒットしたためでしょう、『宵待草』というタイトルの作品、絵も残しています。この色紙（夢二郷土美術館）はその中でよく知られているもので「宵待草に題す」とあって、マツヨイグサなしい月見草はみえませんが、遠くを見つめて坐る女性を描いております。背面に「待てど暮らせど」と歌詞が書かれています。こちらは個人の方が所蔵のもの。坐った舞妓さんの上部に歌詞が記されています。やはり花は何も描かれておりません。また、これは「待てど暮らせど来ぬ人」（一九二三年、個人）というタイトルです。黄色い束になった花、葉っぱや花の形状から月見草だと思われる花を手にして顔を覆って嘆き悲しむ女の。それから、これも「待てど暮らせど」（個人）というタイトルが、夢二自身によって付けられている作品です。

日ごろ私が勉強しております近世以前の作品ですと画家が絵のタイトルを付けるということは普通ないと言いますか、山水だとか花鳥だとか何を描いているかということが便宜上のタイトルになるわけです。しかし、近代以降の画家はおおむねそうではありませんね。タイトルも絵そのものとともに表現の重要な一部です。そして、この時代の画家としても夢二はその意識が強いのか自分でつけたタイトルを作品中に書き込んでいることが多いようです。これは左下に「光れる水」（一九一〇年、夢二郷土美術館）と入れております。光る水を見ている女のを描いて、こういうタイトルをつけています。それから、これは「野火」（夢二郷

土美術館）。主題は野火、煙をみている女の子です。夢二はこのように描かれている女性がみているものをタイトルにするということをよくしています。どれも美人画なので仕方ないという部分もあるかもしれませんが。また後ろ向きの女の人も度々描きます。これは「加茂川」（一九一四年頃、夢二郷土美術館）。加茂川を見ている後ろ姿の舞妓さんです。宵待草的なイメージをさらに追いかけてみますと、こちらは妹尾楽譜「わたつみ」の表紙で、先ほどの「待てど暮らせど」の色紙と同じ姿勢の女性が、黄色い花が咲いている海辺でぼうっと何かを見ている。これは尾崎紅葉の小説『金色夜叉』の表紙（一九二二年、竹久夢二伊香保記念館）。夢二が装丁を担当しました。月見草ではないかもしれませんが、そのような黄色い花を抱いて裸足で座り込む女の。

このように夢二作品に繰り返しみられる月見草のイメージには彼独特の感覚がみられますが、月見草そのものは、どうやら夢二に限らず当時人気があったようです。

月見草という植物は一八七〇年ごろに日本に入ってきたということで、ですから江戸時代の絵には描かれておりません。つまり明治の末に日本にあらわれた、ちよつとハイカラな印象の花だったと思います。鮮やかな黄色で、しかも花そのものが大きいと言いますか花卉がたっぷりして華やか、そして繁殖力が強くて群れて咲くので目につく。

月見草を扱ったものとして私が知り得たなかに、たとえば雑誌『青鞥』創刊号の巻頭に与謝野晶子が書いた詩があります。その最後に「この中に青白きわが顔こそ。芥に流れて寄れる月見草なれ」というふうに書いていて、与謝野晶子にとって月見草はそのたくましさや印象的なものだったようですが、ハイカラな花に新しい自分のありかたを託すといっ

たこともあったのではないかと思えます。夢二も明治四十三年六月二十六日の日記で「月見草は動物以上の蕃殖力をもつて地球上を包むてゐるといふ」と書いていて、やはりきれいで目立つがよく繁るという花とみていたようです。先にみましたように、夢二はそれを宵待草と名前を変え、詩に読むこと、繰り返し描くことで、実際の花である月見草のものとイメージから少しずつ離れて、彼ならではのロマンチックなイメージを附与したといえるかもしれません。ちなみに、夢二は『青鞥』と縁が深く、『青鞥』に関係していた女性で夢二の家に下宿人としていた人があり、社会主義者の伊藤野枝も知人でした。

他にもいくつか小説などに月見草がでてくるものがあるようで、夢二の月見草好きも、彼一人じゃなくて、明治末から大正にかけての文化人たちと言いますか、世の中の月見草のとらえ方と無縁ではないだろうと考えます。

それから「宵待草」の影響というようなことです。何々草というタイトルがちょっとした流行になるようです。何々草というのが、これ以前にどの程度あるのか、きちんと調べてはおりませんが、夢二自身が「忘れな草」（大正九年）の歌詞をつくり、セノオ楽譜の表紙を描き、また別の人の作詞ですが、やはりセノオ楽譜「夢見草」（大正十年）の表紙も描いてもおられます。また、旧制三高の寮歌として「月見草」（岡本扇一作詞）というものが大正八年に作られます。この作詞の経緯については記録 (<http://www2s.biglobe.ne.jp/~tb00346/component/tsukimison.html>) がありまして、そこには夢二の「宵待草」のことは言われておりません。けれども、ある男の人と女の人との悲恋を歌っており、歌詞に月、月見草、「帰らぬ君を待ちつゝも 浜邊の月に泣きたりき」という

言葉がみえ、「月見草」に寄せて、恋、月、待つ、思い出というようにこと詠んでいて、「宵待草」を参照していると言つてよいだろうと思えます。つまり、「宵待草」で夢二が作り上げた世界というのは、それほど、当時の人たちにとつて共感できるというか、感情移入しやすいものだったのではないのでしょうか。

また「宵待草」が非常にヒットしたからでしょうけれども、その向こうを張るように、三木露風作詞、山田耕筰作曲の「待宵草」（大正十年）という曲があります。これは今は歌われることのない曲です。また、昭和五年には「月待草」（村田米四作詞、草川信作曲）という歌もあります。「月待草」という植物も実在しません。宵待草と月見草とを合わせたいような名前ですね。

このようにみてまいりますと、「宵待草」は現在、大正ロマンを象徴する曲として知られておりますが、なるほどそうだと、改めて思います。夢二の叙情的でまとまりのよい歌詞、その叙情性を強くうちだすせつない、そして覚えやすいメロディーがあいまった、じつに「名曲」です。

ここで竹久夢二という画家がなぜこんなに今でも人気なのか、というようなことを少し考え、それを踏まえて「宵待草」について述べ、まとめとしたいと思います。

ここまでお話をできて今さら申し訳ないことですが、私は夢二の絵があまり好きではありません。もともとあまり好きではなく、今回いろいろと調べ、勉強してみてもどうも好きになれません。しかし冒頭にお話しましたように非常に人気があるし、お好きだという方も多い。それはなぜなのだろう、と気になります。私にとって夢二を考えるとということとは、その疑問を考えるとということでもあります。

私が好きになれない一つの理由は、夢二の絵は今どきの言葉で言えば「ゆるい」ということです。先にお話しました夢二が「呼吸をするように描く」ということと関係しております。夢二の作品の大部分は非常に手ばやく描かれておりますが、これは作画時間が短いというだけでなく作品を構想する時間もほとんどのものは短いのだろーうと思います。そういう絵にかけている時間の薄さのようなものが、私にとってはマイナスイメージとなつてゐる。むろん、そうではない作品もあります。そういう制作姿勢、様式を貫いていられること、それに対する甘さのようなどが気にかかります。やはり画家は、描きたいように描くのではなく、どう描くべきか、どう描けるのか、悩んでストイックにそのことを突き詰めていって、それを突き抜けたところにある種の境地を得て描き得る、スタイルができる、のだらうと思つております。ところが、夢二というのは、本当に描きたいように描いているのが、ありありと分かります。その奔放さ、自由さが納得できない。私が日頃、つくりが丁寧な手間暇かけてという絵を見慣れていることも関係しているだらうと思いますが、そもそも日本画というのは、技術的に手間のかかるものですが、その手間をあまりにやすやすと夢二は簡略化している。正規の美術教育を受けていないからこそ、だと思ひます。そんな夢二の自由な描きっぷりに実は圧倒されて、日ごろ自分が勉強している分野の作品が少しかわいそうにみえたりもして夢二に嫉妬しているのかもしれない。もう一つの理由は、彼の作品に色濃くにじみでている彼の女性観、女を男の愛玩物としてみているような、性的な対象としてとらえているような、そういうところに反感をもつたららうと思ひます。

私はそんなふうにも夢二をみているわけですが、世間では老若男女を問

わず、大変に人気がある。それはなぜかと考えてみますと、私なりに思うことが四つござひます。

やはり第一は作風でしょう。大正という時代を象徴するような雰囲気を持つていて、しかも分かりやすい、親しみやすい。この分かりやすさは先ほどお話しました描くのが速いということとも結びついでいるでしょう。そして意識的、無意識的に折衷様式であること。いろんなものがミックスされてます。それが私たちの目にある種の心地良さとか、安心感を与えるように思ひます。

ここで大正時代を代表する官展系の画家がどんな作品を描いていたかを見てみますと、たとえばですが、こういうものです。細部まで下書きを作成し、それに基づいて丁寧な色を塗り込んでいって描いていく。小林古径は特に丁寧な絵をつくる人だと思ひますが、その「極楽井」（一九一二年、東京国立近代美術館）は、まさに夢二が活躍した時代の制作ですけれども、これと比べますと夢二の絵がいかに描くのに時間がかからないかということがお分かりいただけだと思います。第六回文展の出品作です。また大阪で活躍した島成園の「伽羅の香」（一九二〇年、大阪市美術館）。妖艶でちょっとデカタンな、退廃的ともいえるような感じの美人画が大正時代に流行します。この「伽羅の香」は第二回帝展の入選作です。こういう絵が公の展覧会に出品され、認められる、そういう時代でした。そして、その意味でこれもまた大正時代を代表する美人画と言つてよいと思ひますし、現実離れた細身であることなど、夢二美人に通じる点もなくはないのですが、作品全体が醸し出す雰囲気は全く違いますね。これは、今の私たちにとっては気持ち悪い、あくが強すぎてむしろ大正時代を遠い存在にしまつてしまつたというものではないで

しょうか。それに対して、夢二の絵に私たちがみいだす大正らしさというのは、分かりやすいとか納得しやすいんですね。

私は夢二の絵があまり好きじゃないと申し上げましたけど、その私が夢二はすごいなあと思うのは役者絵あるいは芝居絵です。「みちゆき」(一九二二年頃、夢二郷土美術館)は心中する男女の芝居を描いた絵ですけれど、二人の気持ちの暗さといえますか、これから死にゆくゆえの切なさというものがにじみでているように思います。これは、同時期に活躍し、しかも美人画でならした鑄木清方の「薄雪」(一九一七年、福富太郎コレクシヨン)という、やはり心中もの、芝居を主題にした作品です。凄惨な感じはしますが、きれいです。夢二のはそういうのとは違う、もっと泥臭い、人間の本質的な悲しみ、苦しみ、つらさのようなものが画面からふつふつとみる者に伝わってくるような感じなんです。こういう要素が美人画にもあって、それが人気につながっているのだろうかと思えます。「芝居絵 男」(大正後期、夢二郷土美術館)(図4)も心中ものの男でしようけれども、切ないとか苦しいとか、世をすねたとか、そんな目つきが強い印象を残します。夢二が人間観察に優れた、人間の負の感情を見つめ共感できた人なのだとこのことを、こういう作品をみますとつくづく感じます。

折衷様式ということについて、夢二の作品として大変よく知られた「黒船屋」(一九一八年、竹久夢二伊香保記念館)を例にお話します。黒い猫を抱いて「黒船屋」と書いてある箱に女が坐る絵ですが、これは夢二のストラップブックに貼られていた絵と黒猫や女の右手の格好が全く同じで、明らかにこれを原図として使っております。けれども、それが違和感なく、全体として全く夢二風にまとめ上げている。この



図4 「芝居絵 男」
(大正後期、
夢二郷土美術館)

同じ絵から、髪の毛の茶色い西洋女性が猫を抱く絵(「女十題のうち 黒猫」一九二一年、河村コレクシヨン)も描いておりますが、それはそれで元の絵とも少し以前の日本を懐古的に描く「黒船屋」とも別の雰囲気を作り上げております。そこには別の西洋美人画の影響もあるように思われます。さらに、私が見ますと、この箱に坐る女と猫というモチーフは江戸時代の浮世絵の一派である懐月堂派の作品(「懐月堂度繁画「遊女図」十七世紀後半、シカゴ美術館」)を連想します。まさにこの作品そのものを夢二がみた、参考にしていてというわけではありませんが、このような図様の浮世絵を目にしたことはあったのだろうと考えています。このように「黒船屋」には洋の東西を問わずさまざまなイメージ、あるいは様式が入り混じっているわけですが、夢二本人に「黒船屋」はどんな絵を参考にしたのかと尋ねても、きちんとした答は返ってこないだろうとも思います。過去に見たものがこれとそれとと一つ一つ記憶されているわけではなくて混沌と頭のなかにあって、頭をでていくときには既にミックスされて彼の作品としてあ

るということだろうと思います。

また、「立田姫」（一九二七年、夢二郷土美術館）は、最晩年の、代表作と言っている作品、二曲屏風です。秋の女神である立田姫が富士山を背景に立っている。身体は真後ろ向きで、首をひねってこちらに顔を向けている。女性のこういう姿勢、また着物を長く引く姿は、西洋のバツセル・スタイルなど洋装姿の女性の姿、それを描いたものにヒントを得ているのではと思ったりしております。また、この作品の大きな特徴は背景の山が小さく、女神が極端に大きいといういわゆる遠近感を無視したモチーフの大小でしょう。その奇妙な大小関係が女神を神々しいものにみせています。女神を周囲の人間や自然や建物に比べて異様に大きく描くというのは日本の神道画、つまり神様の姿を描くものに例があつて、もしかするとそういうものを参照しているのかなあと思ったりもいたします。あるいは、夢二のモチーフに対する、女性に対する思い、気持ちが大きさとあらわれているようにも思います。夢二の絵には、先に強調した簡略な筆致の作品だけでなく、当然ですが、こういう細部まで丁寧につくりこんだものもあります。この作品は、女性のおでこに少し桃色をいれているところとか、髪の毛の1本1本の描き方とか、大変丁寧です。

このように洋の東西を問わずさまざまなソースを見事にまぜあわせて、ともかくみたものをうまく入れ込んで、違和感なく魅力的な画面を作っていくことができた。それが夢二作品の親しみやすさ、彼ならではの図様、個性を支えているのだろうと思います。

夢二人気の二つめの理由として考えられますのは、西洋との距離とあったことでしょうか。夢二の絵も、それから特に先ほどふれました港

屋の商品のデザインといったものなどは、西洋と伝統的な日本との距離感といったものが絶妙なように思います。明治時代というのは江戸時代までのあり方にさまざまな意味で縛られる一方で、西洋的なものがどっとはいつてくる。そのために、ある部分非常に伝統的に、ところが一方では極端に西洋を目指すといったことがあるようです。ところが、夢二が活躍した大正の前半期ぐらいになると、西洋との距離の取り方というのが、割と自由にできるようになってきたんじゃないかと思うんです。西洋というものが明治のころほどハイカラに過ぎるものではなくなくなってきたし、江戸時代までの日本の古い伝統といったものも少し冷静に見つめられるようになっていく。そうした西洋との距離感が、現代の私たちにとってあるべきというか、納得できるというか、ことがあるのではと思います。現代にまで続く西洋との距離の取り方の原点みたいなものがある。このころにあらわれて、それが夢二の嗅覚ゆえにじつじつにうまく作品に盛り込まれている、ということがあるのではと思います。第一の点としてお話ししました彼の絵のスタイルはまさにそういうものであった、ということですね。

それから、三番目は顕彰のされ方です。夢二はお話しましたように不幸な亡くなり方をしましたし存命中も必ずしも常に順風満帆というわけではありませんでした。けれども死後、友人たちによつてすぐにお墓がたてられるといったように、死後は、変な言い方ですが大変恵まれていました。後に残されていたスケッチ帳や日記などを友人が大切に保存し、やがてそれらを中心に散逸したものを集めて先にもお話ししました通り、長田幹雄さんが出版なさいます。そのように日記、書簡がまともに紹介されることで、夢二という画家がいたということ、そして彼

がどんな人だったのかということが世の中に知れわたった。そしてこれも大事なことです。作品の数が多い。先ほどからお話しておりますように彼の作品の大部分は短時間で仕上がるもので、そのために五十年に満たない生涯としては作品が多く遺されている。そして、作品が多いということは、それだけ人の目にふれる機会が多い、名前が知られ、なおかつ忘れられにくいということですし、冒頭で述べましたような彼の名を冠した美術館が複数あり得るということにもつながっております。これは非常に幸運なことだと思います。

そして四番目に、じつは意外にこれが重要ではと考えておりますが、彼が現代人がイメージする芸術家像にぴったりということがあるのではないでしょうか。女性遍歴が激しい、美人画を得意にする、そして破滅型、芸術のためにさまざまなことを犠牲にしてひたすら邁進する、ついにはあまり長生きをせずに亡くなる。だからこそ、彼は映画や小説に取り上げられやすいわけです。そして、そうした人生を象徴するといつか凝縮したような夢二という画号。先にふれました鈴木清順監督の映画は『夢二』です。「竹久夢二」とか「夢二の〇〇」ではなく『夢二』。それしかなかつたのだらうと思います。商品名が大事なように、画家にとって画号は大事ですけど、夢二の場合、画号がその人生、作品とあいまってイメージづくりに大きく貢献していると思います。芸術家像ということに話をもとしますと、先に述べたような女性、破滅型、不幸な死といったイメージがありますが、実際のところ、そういう生涯を送った画家はそう多くないように思います。女性遍歴はあるが長生きだったり、破滅型だが作品とそのイメージが直結しないとか。そう考えますと、実のところ、夢二がそうした芸術家イメージの形成

にかなり大きな役割を果たしているように思います。

夢二人気の原因、彼の画家としての特性を、このようにみた上で、「宵待草」を考えてみますと、彼の生涯を象徴するような作品だと改めて思います。当時ヒットし今も親しまれているからということではなく、彼の創作の原動力であり、その原点となっていたと考えるからです。「待てど暮らせどこぬ人を 宵待草のやるせなさ」という歌詞ですが、いつも彼は何かを待って、いつもやるせない気持ちでいる。満ち足りるということがない。常に何か足りない、足りないと思いつけて生きているようなところがある。それが、どこか寂しげではかなげな女性をはじめ人間の負の部分を見つめた絵の内容につながっているように思えてなりません。自分自身の、何かを待っているやるせない気持ちを原動力に、それをともかく作品に注ぐことで生きている。夢二はそういう人だったのだらうと思います。そうしたことを秋山清さん（秋山清『秋山清著作集』第六、七、別巻 秋山清著作集編集委員会編 ぱる出版 二〇〇六）（七年）は早くに、よりの確なかたちで指摘しておられ、私は多少の影響は受けたかもしれませんが、今回、夢二について調べ、考えるなかで、つくづくそのように思いました。

資料に「私にとって絵をかく事も、歌をつくる事も等しく自分の生活の創造である。自分の作品は悉く自画像である」（夢二の著書『昼夜帯』の広告）という夢二の言葉をあげております。彼は自分がかわいい、自分に甘い駄目な人間：日記や書簡などを読めば読むほど、そういう思いがいたします。けれども、生きていくことのすべてを絵を描くこと、歌を作ること、何か物、形にして残すことに注いだという点で、そしてそれらの作品が多くの人を魅了した、し続けているという点で、

非常に稀有な、特別な人であるなあと、今回改めて思ったような次第です。

(かどわき むつみ・本学国際人文学部国際文化学科助教)

付記：図1、4は『夢二美術館 恋する女たち』（河北倫明ほか監修、学習研究社、一九八五年〔新装版一九八八年〕）より、図3は『展覧会図録』竹久夢二展 描くことが生きたこと』（千葉市美術館、二〇〇七年）より複写転載した。図2は講演者の撮影である。